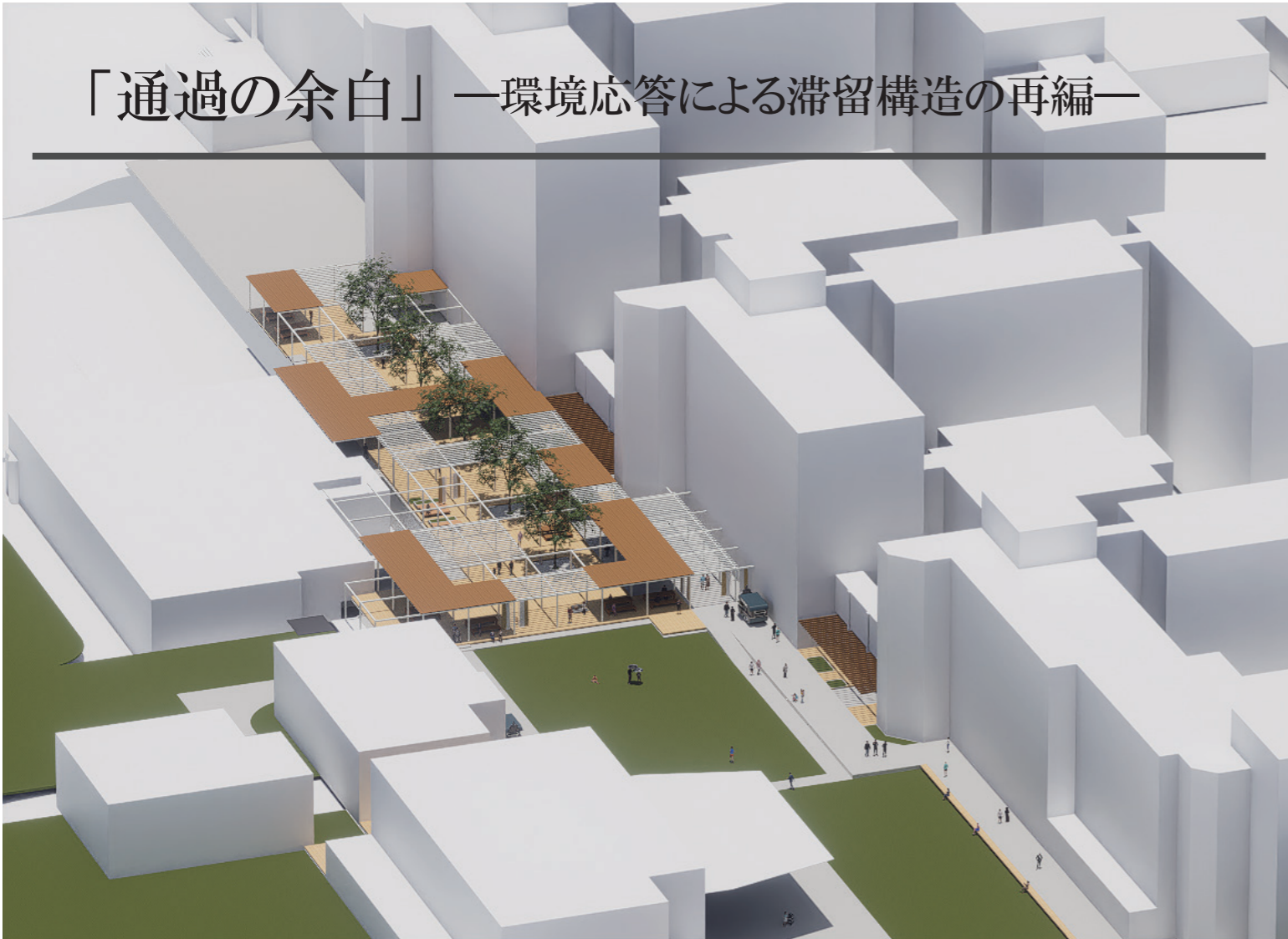
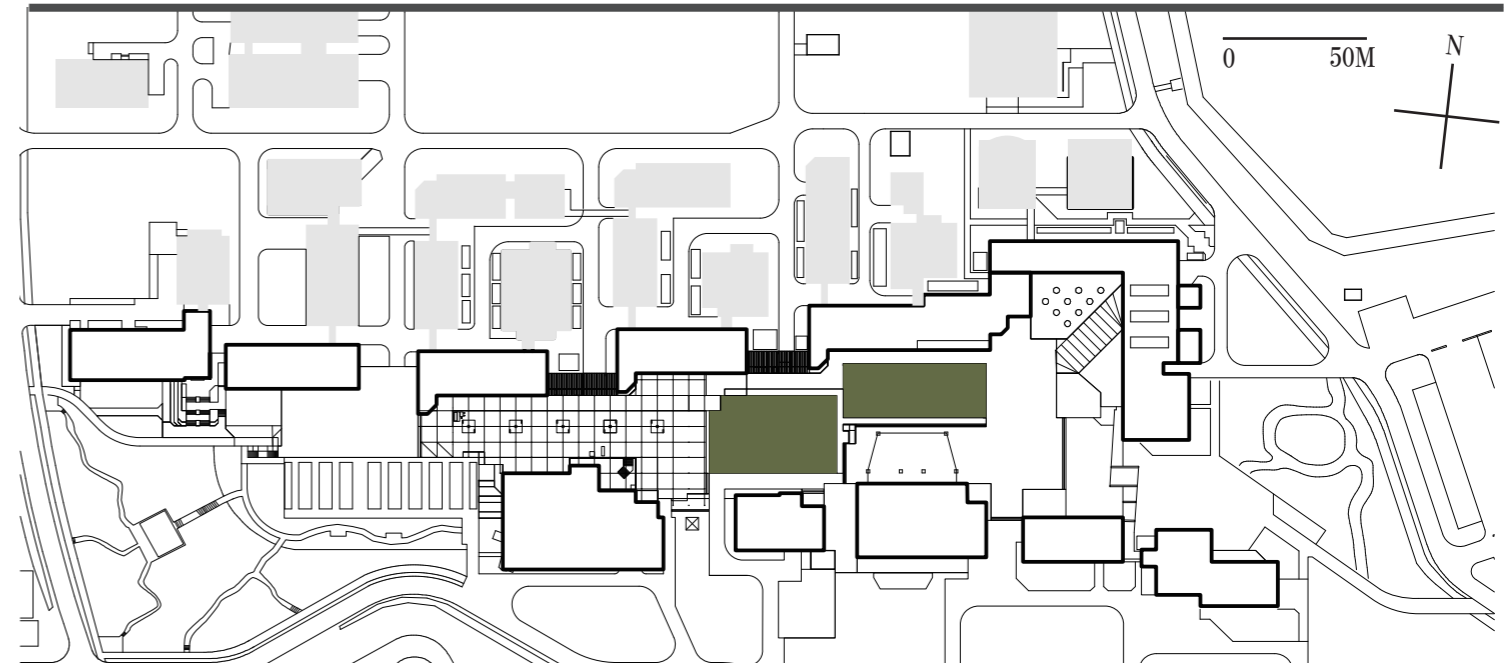


# 「通過の余白」—環境応答による滞留構造の再編—

最優秀賞



## センターコート 全体計画



人が自然と集い、交流が生まれる大学の顔」という与えられた理念に対し、環境的条件からアプローチする。学内アンケート調査より、現在のセンターコートは通過空間として機能する一方、滞在空間としては機能していないことが明らかとなった。本計画では、講義棟と福利施設を結ぶセンターコートにパーゴラを挿入し、実測した風環境・温熱環境データを空間設計へと反映させる。日射が強いグリッドにはルーバーや屋根を、風が強い箇所には植栽帯を設けることで、均質な広場を環境条件の異なる単位へと再編する。固定的な快適性を与えるのではなく、季節・時間・場所に応答する可変的な快適性を構築することで、通過の庭を、滞在を許容する庭へと転換する。

## 1. 課題と可能性

### ■ 動線

植栽や花壇の配置により主要動線が分断され建物間の移動に回り込みが生じている。

### ■ 風環境

B.C.D.F 研究棟間では、局所的に風速が増大しており、夏季においては快適性に寄与。

## 2. 中庭の目標像

### ■ 広域計画

卓越風と日射条件を基盤に動線と滞留空間を再編し、季節に応じて快適空間を選択できる構造をつくる。

### ■ 地域計画

均質な中庭空間を再編し、環境特性の差異を活かした滞留構造への転換。

## 3. デザイン方針

### ■ コアエリアの設定

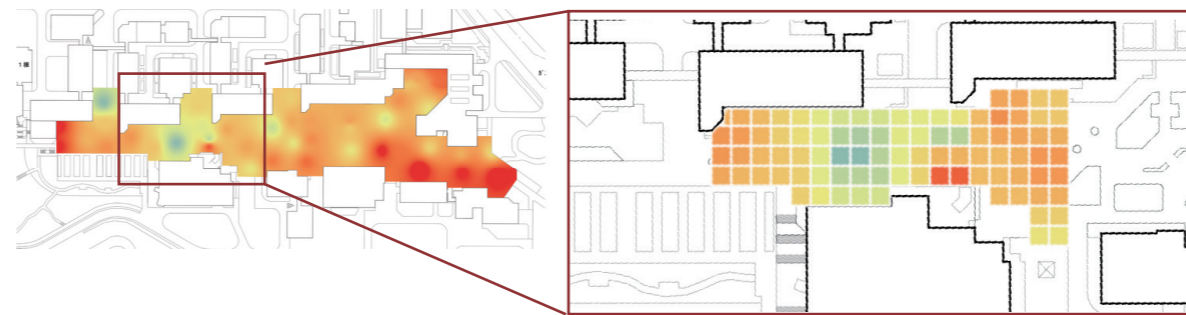
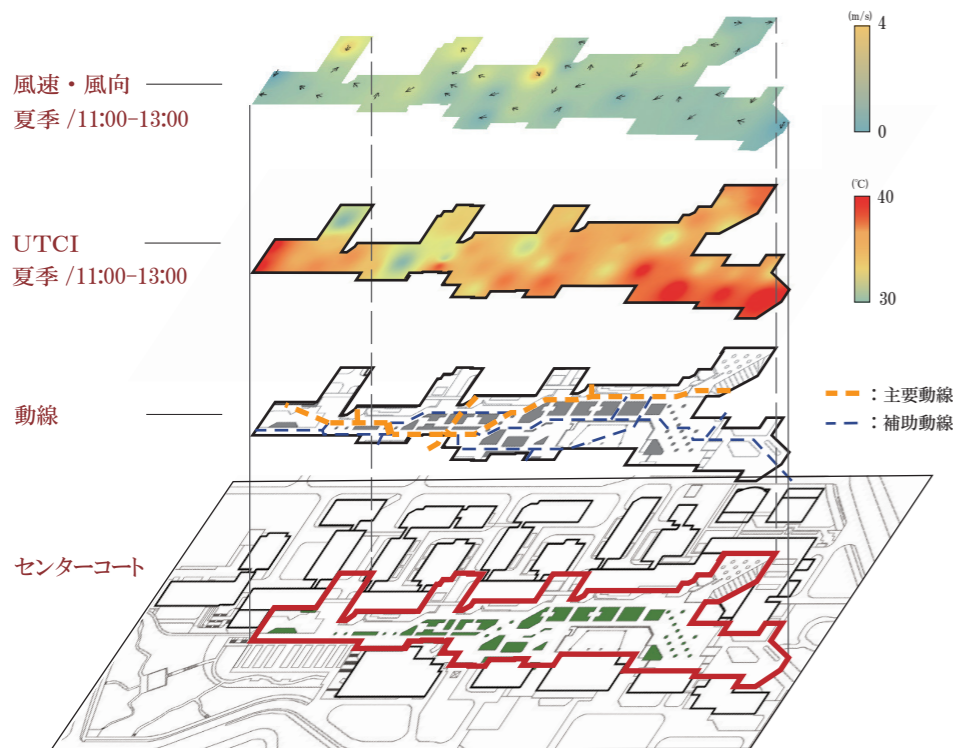
夏季における UTCI の算出結果および日常動線の利用頻度を考慮し、以下のエリアでは快適域をカバーできると判定し、コアエリアとする。

### ■ 滞留空間と動線の分解

5m×5m グリッドにおいて、環境特性により変化していることから、UTCI 分布の分解を行う。

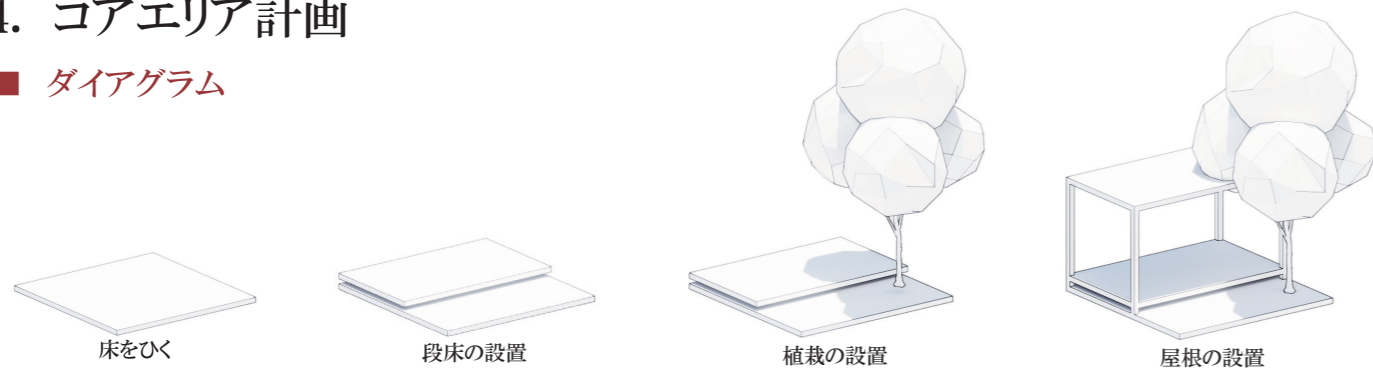
### ■ 滞留空間のレイアウト

環境特性に対応させて6つのレイアウトを配置。



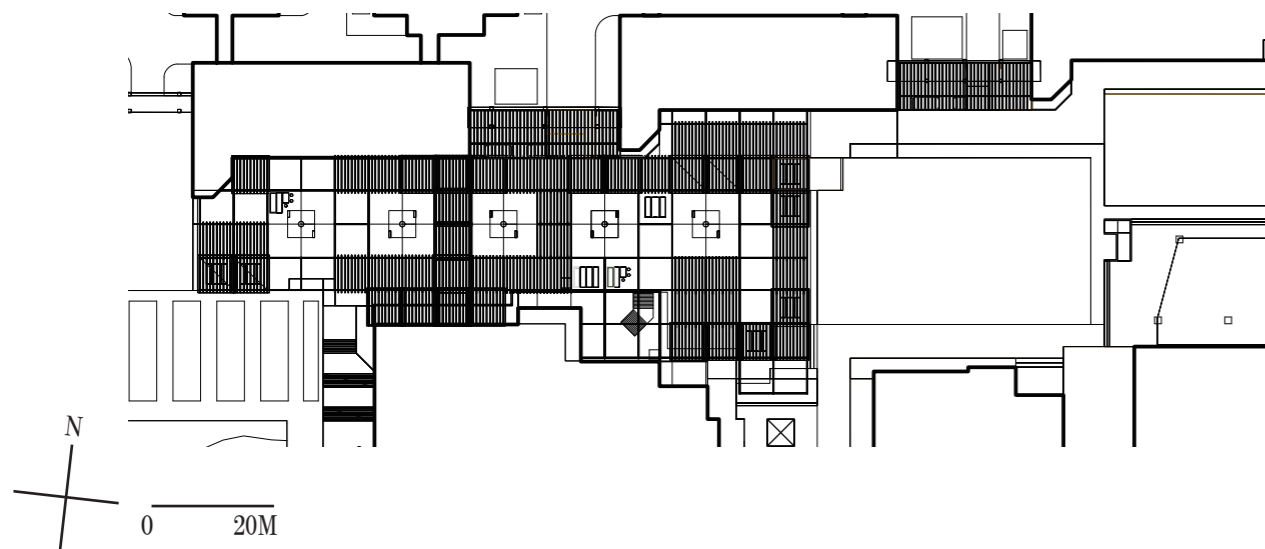
### 4. コアエリア計画

#### ■ ダイアグラム



#### ■ 計画平面図

講義棟と福利施設を結ぶセンターコートに木造パーゴラを配置し、通過空間となっていた中庭を滞在可能な空間へと再編する。  
 パーゴラはグリッド状に配置され、日射の強い部分にはルーバーや屋根を設け、風の強い箇所には植栽を配置することで環境を調整する。  
 グリッドごとに異なる環境条件を生み出すことで、利用者はその時々での快適な場所を選びながら滞在できる。



#### ■ 立面図 (1:2000)

木造パーゴラの架構を連続させ、屋根・ルーバー・植栽により光と風を調整した半屋外空間を形成する。

### 5. 利用想定

#### ■ 晴れの日

パーゴラの木陰の下で学生が集い、昼食や会話、課題作業など思い思いの時間を過ごす日常的な滞在空間となる。



#### ■ 夜の姿

柔らかな照明に包まれた中庭は落ち着いた雰囲気を生み、夜間も学生が集い語らうことのできる居場所となる。



#### ■ 雨の日

屋根付きのパーゴラ下をすることで雨を避けながら移動でき、雨の日でも屋外での滞在や交流が可能となる。



#### ■ イベント時

中央広場を活用し、学生イベントや展示、交流活動など多様な催しが行われる大学の象徴的な場となる。

